

ベトナム反戦運動は一九六五年に日本で発足しますが、そこには「声なき声の会」の中心メンバーだった人たちが大きく寄与しています。

### Ⅲ ベトナム戦争とベトナム反戦運動

#### ベトナム反戦運動とベ平連

ベトナム戦争は、一九四五年から引き続いて長い戦争です。ベトナム戦争が最終的にアメリカの敗北に終わり、北と南のベトナムが統一してベトナム民主共和国が成立するという事態は、世界史のなかで重要な出来事の一つだったと思っています。第二次世界大戦以後の世界的な大事件を三つ挙げるとすれば、中華人民共和国の成立、ソビエトを含む共産圏グループの崩壊と並んで、ベトナムの勝利が挙げられるでしょう。アジアの小さな農業国であったベトナムが、世界最大の軍事力、経済力をもつアメリカと戦い、勝利するとは、考えられなかった出来事でした。

ベトナム戦争は世界のさまざまな国に影響を与えますが、いちばん大きかったのがアメリカに対する影響です。それまで敗北を知らなかったアメリカ合衆国がはじめて敗北を喫し、その傷は内部に深く刻まれた。アフガンやイラクに対してアメリカが攻撃を始めたのも、実はベトナムにつけられた心の傷を癒すためという側面があるとさえ思っています。

ベトナム反戦運動は六五年以降、次第に大きなものとなりました。一九五〇年代の原水爆禁止運動や六〇年安保闘争もそれまでなかったような大規模な運動でしたが、ベトナム反戦運動はそれらの以前の運動とは際立った違いをもっていた。完全に断絶したとは言えませんが、両者の間には基本的な点で本質的な変更がありました。

一九六五年二月にアメリカは北ベトナムに対する大規模な爆撃を開始します。トンキン湾でアメリカの軍艦に対

して、北ベトナムの駆逐艦などが攻撃をかけたのに対するリベンジとして北ベトナムに爆撃をすると主張したわけですが、それがでっち上げであったことが後になって明らかになります。北ベトナムのアメリカ軍艦に対する攻撃がなかったことを、マクナマラ国防長官自身が発表したのです。根拠も大義もなく、アメリカは北爆を開始したのです。

これに対する世界各国の反対運動は大きなうねりとなりました。ヨーロッパやアメリカでは二月の北爆開始直後に万単位の反戦デモが起こります。ソ連や中国など、当時の社会主義国では国家が主導して抗議活動が行なわれます。日本はちよつと遅れて、ベ平連の最初のデモは四月二四日、爆撃から三カ月近く経っています。作家の小田実さんや開高健さん、その他の知識人や一般の人びとを集めた運動がともかく一九六五年四月に発足します。

ベ平連ができたとき、どう評価され、批判されたのか。たとえば、新左翼の党派などからは、「プチブル的な連中の集まり」、「階級意識をもっていない文化人の遊び」という批判を浴び、「進歩的」評論家からは、『ニューヨーク・タイムズ』の一面を買い取って「ベトナム反戦の意見広告」を出すという開高健さん発案の大衆運動に対して、「免罪符」だと揶揄されました。五〇〇円か一〇〇〇円のカネを出すだけで自分がアメリカに抗議する格好をつけられる、安い免罪符のようなものだ、というわけです。「のんびんだらりと風船をもって、呑気に警官と仲よく肩を並べているデモはベトナム反戦運動になっていない」という批判も強くありました。共産党からは、ベ平連は「修正主義者」に利用されていると言われたり、「ベトナムに平和を！」という表現が間違っていると言われました。「ベトナム人民への支援」、あるいは「アメリカ帝国主義への批判」と言うべきだというのです(たとえば、上田耕一郎「ベトナムに平和を」のスローガンについて、『アカハタ』一九六五年五月一日、あるいは霜田正次「ベトナムに平和を！」への疑問、『アカハタ』一九六五年五月三三頁)。

先陣を切っていた学生運動のほうは、「スネーク・ダンス」と言われるジグザグにうねるようなデモをやり、機動隊とも衝突し、ときには火炎瓶を機動隊に向けて投げつけるような過激な行動をとるようにしていきます。

『戦後日本スタディーズ2——60・70年代』冠伊國屋書店、二〇〇九年)には、私へのインタビューとともに、

ウーマンリブ運動の田中美津さんへのインタビュアーが収められています。インタビュアーは東大の社会学の教授、上野千鶴子さんです。当時の女性解放運動についてのやり取りですが、そのなかで上野さんは、「ベ平連がかっこいいって見方もあるけれど、新左翼からはベ平連ってヌルい・ダルい」と見られてましたね。目の前のキャンパスの中では闘争はどんどん武闘化していったでしょ。最初素手で行っていたデモに、今度はヘルメットが加わり、それからゲバ棒が加わってというふうには、ひとつの転機が火炎瓶が登場したことですね」と言っています。

「ベ平連トンネル説」というのも当時ありました。ノンボリの青年は、まずベ平連へでも行って、そこで「ヌルい」「ダルい」運動をボチボチとやったらよろしい。そのうちにそんなものに満足できなくなると、もつと激しい闘争が必要だと自覚するようになる。そのトンネルであるベ平連を潜って、トンネルの向こうへ抜ければ、そこには「わが革マル」とか「わが中核」が待っている。これが「ベ平連トンネル説」でした。

新左翼をマスコミではよく「過激派」と言います。これは「ラディカル(Radical)」という英語の翻訳語として、マスコミと権力が使った言葉、いまも使っている言葉です。「ラディカル」は、「過激」という意味で言われますが、本義は「根源的、根本的」ということです。問題の本質を見据えて、根源からものごとを考えて、やるべきことを決めていく、それが本来の「ラディカル」です。闘争形態の激しさではなく、活動の社会的意義こそが「ラディカル」かどうかの基準になるとすれば、ベ平連を「ヌルい」「ダルい」と言っていた新左翼の党派よりも、ベ平連のほうがよりラディカルであった場面はあると思っています。後に、「脱走兵援助」の問題を通して具体的に考えてみます。

#### ベ平連の四つの特徴

ベ平連の特徴として、四点を挙げたいと思います。

##### (1) 加害者の自覚

五〇年代半ばからの原水爆禁止運動は、大規模に展開するものの、「唯一の被爆国である日本」という言い方に

表れているように、日本国民以外に目が向いていなかった。広島や長崎でも、日本人以外に朝鮮人、中国人、フィリピン人、アメリカ人などの被爆者がいたし、マーシャル群島には核実験で甚大な被害を受けた人びとがいることが視野に入っていなかった。

六〇年代安保闘争も、「もう二度とあんな酷い日にあいたくない」という戦争拒否の意識が運動の基本的な契機になっっているにもかかわらず、最大の犠牲を出した沖縄の人びとのことは考慮の外にあり、また、その酷い戦争をつくり出すことに日本人自身がどう加担したかという自覚はほとんどなかった。

六〇年代後半のベトナム反戦運動を考えても、ベ平連は六五年四月発足から一年くらいのあいだは、主要には「被害者意識」を前提にした運動だったと言えるでしょう。ところが運動が展開する過程で徐々に「加害者意識」が醸成されていきます。

「加害者」という問題を運動のなかで最初に提起したのは、作家の小田実さんです。一九六六年にベ平連は「ベトナムに平和を！日米市民会議」という国際集会を東京で開きます。アメリカからかなり多数の活動家を招いて、日本の代表と一緒に議論しましたが、その一九六六年八月の集会で行なわれる基調報告のなかで、小田さんがはじめて「加害者と被害者の関係」について、明確な提起をします。「私たちは戦争の被害者だ、しかし、被害者になることにおいて実は加害者にもされていく。そしてその加害者がさらに大きな被害者になっていく」という、「被害者から加害者へ、加害者から被害者へ」という「加害・被害の循環の論理」を説きます(小田実「平和への具体的提言」、小田実全集評論『平和をつくる原理』に所収、講談社、二〇一〇年、一四四頁)。

その六〇年代後半には、日大全共闘や東大全共闘といった学生運動、全共闘運動が盛んになり、反戦青年委員会という労働者青年のグループもできます。その全期間とは言いませんが、その初期においては、全共闘も反戦青年委員会もベ平連の「加害者の自覚」という問題意識を共有していたと思います。一九六八年以降の「内なるベトナム」や「内なる東大」という全共闘のスローガンは、ベトナム戦争を支えている日本社会への告発、国家権力に奉仕する学問体系に組み込まれている自己への告発であり、「加害者」意識に基づいたものだと考えます。

実は、その自称ジョンソンという名前のスパイを日本の市民の家に次から次へと匿うときに、先にお話をした東京工大の数学者、早川康式さんのお宅もそのなかに入っていました。スパイだった男を何日か預かってくれました。当時学生だった早川さんの息子さんは、預かった男はどうもおかしい、スパイの疑いがあるとベ平連に伝えてくる。それにもかかわらずベ平連が匿い続けたために、早川さんの家のこともスパイによってすべて報告されてしまうわけですから、ご一家にとつても不愉快なことだったと思います。ところが、早川さんはそれについて批判めいたことは一切言わず、「ベ平連を最後まで支持する」とおっしゃった。

やはり早川さんは、戦中の反帝同盟のスパイ査問等がどれほど人間を歪めてしまうか、どれほど運動を腐敗させ墮落させてしまうか、心に染みるように理解をしていたのだと思います。戦前・戦中の活動の失敗をその後の運動のなかに生かしていくという精神が早川さんにもあったし、同じことは埴谷雄高さん、栗原幸夫さん、鶴見俊輔さんにもあったのだと私は思います。

## 市民運動の未来へ

### 建前と本音

私はずっと運動のことを申し上げてきましたが、普通の人生においても同じことは言えます。どんな人間でも、間違ふこと、誤ることは必ずあります。一生、神様のように生きていける人間は一人もいません。逆に、最初から最後までダメな人間もありえない。一人の人間の一生のうちには、その人の最も優れたところが光になって周囲に放たれる時が必ずあります。人間をそういうものだと理解しておけば、最初から間違つた人間、追放するか、殺すしかない人間という発想は生まれません。

建前と本音の違いがあります。建前は誰もがつけているでしょうが、それを全部遵守しているわけではない。インチキやずるいことをやっている。本音が常に付いてまわります。この建前と本音は、組織、運動においても、一人の人間においても表裏一体としてある。建前だけの聖者もいないし、最後までインチキな人もいない。大切なことは、運動でも個人でも、建前ではない本音があることは自覚したうえで、インチキや本音を、どれだけ自分がつけている建前のほうに近づける努力をするか、です。

人間は本来弱いものですから、ついついだらしなくなったり、挫けたりします。時間が経つと、最初の強い意志がだんだん弱くなり、忘れてゆくようになります。何か支える棒がないと続けられないと私は思っています。「わたしとビール」(『図説 昭和の歴史』第一巻月報、集英社、一九八〇年。吉川勇一『市民運動の宿題』思想の科学社、一九九一年)というエッセイを紹介します。私はビールが大好きで、サントリーでもサッポロでも喜んで飲みますが、キリンは飲まない。私は、三菱重工業に対して軍需生産反対の行動を起こすべく、一九七一年に一株株主として二回株主総会に出席しましたが、二回とも三菱に雇われた暴力団に殴られ、「ベ平連のチヨーセン野郎!」と罵られますが、「チヨーセン野郎」(もちろん「挑戦」ではなく「朝鮮」です)という言葉が非難あるいは罵る表現として言われたことはありませんでした。そのとき、私は身体が動かなくなるほどのショックを受けました。そのときの衝撃と自分自身の思想的基点を一生忘れないために、一切の三菱製品を使わず、三菱資本のもとにあるキリンビールを飲まないと決めたのです。カメラもニコンは使いません。

自分の意志を通すため、あるいは希望を成就させるために何かをやめることを「断ち」と言います。「酒断ち」「茶断ち」などと言うでしょう。私の場合は、「キリンビール断ち」のようなもので、それを飲まないことよって、自分の考え方、建前をその都度覚醒させる。弱い人間、つい建前を忘れてしまう人間にとつて、支えが必要だと自分で決めました。だから、もちろんほかの人にキリンビールを飲むなというつもりは毛頭ありません。